戰時の歐洲地理學界

理學博士　小川琢治

歐洲に於ける戰爭の勃發以來既に一年有半に垂んとし、北米合衆國を除き重なる列國皆な其渦中に入れる結果として、日本に輸入する出版物は以前の如く豐富ならず。就中獨墺兩國は封鎖せられ一時は獨逸出版の書籍雜誌は全く輸入の途を絕ち昨年九月以後漸く其搬出の途再び開け、蘭國を經由して吾人の手に達することゝなれり。地理學は他の自然科學に比して時事問題に關聯すること密接なれば、現在戰時の學界の風潮は自から平時に異るものあり。史林の發刊が宛も此の永久に記憶さるべき時期に當れるを以て、吾人は左に過去一年有半の概況を記せん。

戰爭開始後最も激烈なる損害を被むれるは白佛兩國にして、倫敦伯林の地理學會と鼎立せる巴里地理學會の機關 La Géographie は一昨年七月以後久しく刊行を見ず、十二月に至り初めて薄き一冊子出でたるのみ、其後又た杏として新刊號に接せず。恐らく中央政府のボルドー移轉後今に至るも幹部委員の常時の如く會務を見ることを得ざる結果なるべく、同學者として吾人の遙かに同情の念に禁へざる所なり。

英國に在りては戰爭の影響を被むること絕無に非ざるも、倫敦エヂンバラ等の地理學會の機關雜誌は連續して刊行せられつゝあり。シャックルトン氏の計畫せる第二回南極大陸探檢の如きも豫定の行動を變ずることなく、一昨年開戰後出發の途に上れり。是れ第十八世紀末にカピテン・クックの探檢船が歐洲の戰亂に無關係に其科學的探究に從事せると同一の場合なるが、獨國潛航艇の他日何れかの洋海に於て此の探檢船に邂逅するに當りて、佛國海軍が特にクックに對して中立國船舶の

優遇を加へたる如き雅量あるべきや否や。

獨逸發刊の雜誌は昨年九月以後再び輸入され、一昨年七月より十二月までの分は今尙ほ著せざるも、昨年一月より八月までの諸號により略ぼ戰爭開始後の獨逸地理學界の景況を察知するを得るものあり。過去七八年來の獨逸學に於て特に注意されしものは軍事地理學にして、ペーテルマン地理學報の如き一九〇九年十月よりラングハンス敎授の擔任せる別欄を設けて、之に關する專門家の論文が掲載さるゝことゝなれり。蓋し軍事地理學の研究は獨逸に於ても墺佛伊等に於けるが如く、久しく主として軍學者の手に在りて、一九〇一年春余の伯林に遊びし際、獨逸に行はるゝ軍事地理學の成書を獲んとして當時留學の某軍人に諮りしに獨逸にては軍事地理學は國防の秘密に涉るを以て外國武官には陸軍大學校の聽講を謝絕しつゝありといひて、其著書の如きも之を獲る能はずと聞けり。然るに其後十年ならずして此の如き民間の學術雜誌に研究項目として掲載せらるゝに至れるは恰も一方に同國に於ける戰時經濟等の研究と相待ちて、戰爭に對する諸方面よりの研究開始せられたる一紀元と看做すを得ん。其後モロッコ問題に獨逸が殆んど劍戈相見るの態度を執り、終に一昨年の開戰を見るに至れるもの、決して偶然の突發に非ずして、殺氣は此頃早く既に獨逸國民の全部に横溢せるならん。近刊ペーテルマン地理學報を繙くに、軍事地理學の特欄は撤去されたるが、是れ消滅せるに非ずして、項目の大部分が戰爭に直接又は間接に關係するものより成り、從前の一般科學的方面の論文と主客全く顚倒せるのみ。試に昨年一月より七月までに該誌上に現はれたる主なる論文を示さんか、

オプトス氏フランダース地理略誌ト

ランゲンベック氏ブルゴアヌ山門

フロベリウス氏境界山嶽峯線の戰略的價値
エーゲマン氏グルマヲンの海としての東（バルチック）海
フエーリンゲル氏戰略的防禦地帶としての英領印度の西部境界地方
エス・ギユンテル氏白耳義の境界
ケレル氏フランダースの漲溢
レーマン氏森林カルパーテンの嶺
クランツ氏中歐戰爭に於ける地質學の同題

此他にルーマニア、希臘等のバルカン諸國に關する論文あり。又た同誌の補編 Ergänzungsheft 第百八十四篇として、

フロベリウス氏歐洲軍事地理學第一編地中海諸半島（一三四頁）

を刊行せり。此間に異彩ある科學的論文として

ベルンハルド氏科學的學課としての農業地理學 Agrargeographic

を擧げ得るのみ。

ヘットヲル氏主筆の地理學雜誌 Geographische Zeitschrift 第二十一年の一月より八月に至る諸號も亦た戰局に關するもの多く、就中

ジーゲル氏墺匈國の地理的基礎及對外政策

は注意すべきものにして、多くの地理學者の間に唱導され、殆ど定論の如くなれる、墺匈國の多種民族の聚合より成りて、鞏固なる國家としての地理的要素を缺陷するとの意見を反駁せるものにして、內に相鬩げる諸民族が對外關係に於て相親和して奮鬪することを得るを辯ぜり。蓋し今回の戰爭に於て獨逸族とマヂヤル族とが共通の敵國たるスラブ族に對して極力奮鬪しつゝあることは、吾人も亦た事實として認めざる可らざる所なり。然れどもチエック族、其他のスラブ系統の多數異民族が如何なる感情を懷抱して戰爭に參加せるやは疑問にして、全然一般の解釋を否定し難かるべし

又た

カール・ドーブヱ氏佛國に對する佛蘭西殖民國の意義

の一篇の如き、多年に亘る佛國殖民地の經營に比して獨逸アフリカ殖民地の長足の進歩を說き、母國人口增殖による國外溢出の必要なき佛國殖民地は、戰捷の結果當然獨逸の手に入るべしとする如き口吻を認め、獨逸地理學者の欲する所を窺ふに足るものなり。

ペーテマルン誌と同じくゴータのペルテス社の刊行する地理學指針 Geographischer Anzeiger は學校地理學 School Geography の機關なるが、其戰時の色彩特に著しく、一月號に歐洲全圖を附圖として揭げ與敵と敵國中立國を色分けにして示し卷頭にはヒンデンブルヒ元帥の肖像を揭ぐるなぞ其武裝せる意氣如何にも物々しげに見ゑ、從來地理敎育に政治區劃を無視せること、今回の戰爭開始後に大に不都合となれるを論ずる、亦た時勢の變化とはいへ、餘りに極端なる偏見たるを免れず吾人は十餘年前にスチーレル輿地圖の手摺手塗銅版圖より色刷石版に遷ると同時に、從來よりも國境の色彩が濃く幅廣くなりて、境界に當る山嶽などの不明瞭に陷りしを惜み、朱線のみにて示せるシドーワグヲル學校用輿地圖の遙かに使用に便なるを感じたりしに、今此の議論の如くんば、將來の獨逸地圖も亦た英米諸國に出版せるものと同じく、政治區劃の色彩のみに掩はれたるものとなるべきか。

伯林地理學會雜誌はリヒトホーフヱン氏の後を承けてペンク氏等の協力刊行する所に係り、其戰時の色彩は前述諸誌の如く顯著ならざるも、過去多年の諸號に比して資料が多少減じたるの觀あるは、蓋し少壯學者の多數が劍を手にせる際として已むを得ざるべく、地理學雜誌と同じくフレヒ、

バルチ。ペング。オーベルフムメル等の老教授が戰場に關係ある問題に就き筆を執れるも亦た同一の理由ならん。

巴里倫敦と伯林の地理學會間に起れる爭論は戰爭の餘波學界に入れるものにして、問題の一は一昨年十一月二十七日開會の巴里地理學會席上に於て、會長ラルマン氏の演說が獨軍の暴行を擧げ、其膺懲を叫び、其聯邦を解き原の如く個々の小邦たらしめざる可らずと論じ、次でブロンデル氏の獨逸富源及野心と題して講演せる所に對し伯林側の駁論あり。又た昨年二月二十四日倫敦地理學會に於けるヂョンストン氏の戰前及戰後のアフリカ洲政治地理と題する講演に於ける獨逸殖民地喪失を豫想せる政治區劃圖に對しても論難を試みたり獨逸文明の優越を主張する獨逸學者の態度として此の如き論戰の起るは敢て怪むに足らざる所なり

今回戰爭の飛沫が中立國の地理家に及べる一樁事は、巴里地理學會が瑞典のスエン。ヘヂン氏の通信會員の籍を除き、更に進んで賞勳局に其勳章褫奪を申請せることなり。是れ一昨年十月ヘヂン氏の獨軍に從軍して、獨佛國境戰場より鄕里の友人に與へたる書簡が公にされ、其書中に佛國を侮辱せる語句ありしによるものにして、ヘヂン氏は獨逸の兩隣國より挾擊されしに同情し、其前後の勝利を豫想しつゝあるは、近頃出版されし『武裝せる國民』Ein Volk in Waffen(英譯)『西方獨軍從征記』With the German Armies in the West の每頁の輕快な筆端に躍如として、英佛諸國民に不快の感を與へしは尠少ならず。昨年三月二十二日の倫敦地理學會に於て、同じくヘヂン氏は中立國民なれども、其行動及び出版せる文書に於て英國先帝の敵たることを示したる廉により、名譽通信會員の名簿より除名することを決議せり。之と同時に獨人の人氣を博し得たことも亦頗る大にし

て、ペンク氏の如きは英國の新聞に曲筆せられたる獨軍の眞相を明にしたるに對して伯林會誌上に滿腔の謝意を披瀝せるは、好箇の反襯なり。抑ヘヂン氏の最近數年の消息を聞くに、四年前に瑞典國の露國の侵略に備ふるが爲めに軍備擴張の必要なるを鼓吹し、嘗て露國より受領せる勳章を褫奪されたりといへば、瑞典人として對露敵愾心强く延きて英佛兩國にも反抗の意氣を負ひ、今回の獨國從軍の擧となりしならん。而かも其本國にも亦た其意見に反對するものありて、現に其從征記を瑞典のある社會より排斥（ボイコット）せんと試みたるものありといふ。ヘヂン氏を獨逸軍に傭はれて其提灯を持つものとする佛人の憤懣果して當れるや否や、吾人は烏の雌雄を識らざるなり。

ペンク氏は今回の戰爭に於て敵國抑留の不虞の厄災を被むれる一人にして、一昨年八月八日より三十日まで濠洲に開ける英國學術奬勵會に出席せるが、他の獨逸學者七人と共に濠洲に着せる後、間もなく英獨開戰となりしも、開會中は招待員として參加し、歸國に至り少壯の軍籍に在る學者二人は抑留され、ペンク氏は英船にてロンドンに送られしが、其濠洲の事情に精通するの故を以て、獨艦の印度洋に徘徊する間倫敦に抑留され、エムデン號擊沈後初めて釋されて本國に還るを得たり其抑留中の印象を記せる小冊子の出版ありしと聞く。此他地質家ワルテル氏は一時カイローに抑留されて間もなく釋され、人類家ルシャンは蘭領印度より米國に渡りしも、今尙本國に歸らずといふ

數年前本邦に來遊せるヘットヲル氏も亦た一昨年開戰後戰爭に關係せる著書二種を公にせり。其一は『人類地理學の一研究、歐羅巴露西亞』にして、恐らくは以前に公にせるものゝ再版なるべく其二は『英國の世界制馭と戰爭』と題し同じく英國の現在の地位に對する客觀的判斷を施さんと試

みたるものなり。グライフスワルド大學のフリードリクセン教授の『歐羅巴露西亞の隔境地』と題せる小冊子は、前者と同じく獨逸の交戰國事情を科學的に說明せるものなり。

之を要するに開戰以來の歐洲地理學界に於て最も活氣あるは獨逸學者なること上に述べたる如く其研究する科學を戰爭の問題に直接又は間接に結び附けて何等か貢獻する所あらんとする努力は、世界を敵手として戰はんとする國民決心の一部なるべし。吾人聯合軍側の戰報の屢不利なるを聞き其努力の未だ十分ならざるを疑ふもの、今本篇を草するに當りて轉た聯合國の學界の寂寥たるを遺憾とせざる能はざるなり。

壺井鶴翁に就て

文學士　林　森太郎

本題に就て余は五項に分つて說明したいと思ふ即ち第一總說、第二鶴翁の事蹟、第三鶴翁の著書、第四鶴翁の功績、第五鶴翁の門人、これである。

其の一　總　說

第一は此鶴翁の背景を描く積りで鶴翁以外の當時の故實學者の事を少し述べたい、元和假武以後朝廷に於ては久しく廢絕したりし儀式典禮を段々御再興になつたので、其必要上諸家の記錄を探り古典を詮索する公卿が出たが、當時は記錄文書の類、世に乏し、所謂寬永有職で錯誤や失考も尠からぬことであつた。其後元祿時代の文運勃興と共に地下の間にも朝廷の儀式官位の制度は言ふ迄もなく、宮殿の構造、衣紋の故實調度の製作に至る迄を研究する一派の學者が現はれ所謂有職の學即職學が一科の學問として獨立する機運に向つた。

さて此元祿時代に京都に住で此方面に直接に關係のある人を數へて見ると先づ堂上家で裝束の家